レイパーホイホイ金責め去勢

闇サイトでレイプ共犯に応募する男。
しかしそれはレイプ魔狩りをしている
女性集団の罠だった！
無人の島で去勢リンチが始まる！

玉子王子　著

１章　レイプ共犯者募集！　詳しいことはクローズなところで！（去勢団体の罠）

サイトに書き込み。

権利行使しませんか？　出来れば経験者、未経験者も可。

入れ食いの場所があります。詳しくは密室で。

坂上はその書き込みに目を留める。

「入れ食いねえ……」

そう上手い話があるかと思うが、一様連絡を入れてみる。

坂上は、恵まれない家庭に生まれた。

両親はさっさと離婚。

坂上は母親についていく事になった。元々反対を押しきって結婚したらしく、ほれ見たことか、と非難されるのを嫌った母親が祖父母と距離を置いたので、当然坂上も彼らと縁も切れた。

その後、母親はお決まりのようにガラの悪い男を引き込んだ。

運が悪ければ母親が連れてきた「恋人」に殴り殺されただろう。

何とかそうならず、中学を出てすぐ家を出た。

運良く、当時うさぎ市で隆盛を極めていたスカウトの組織に拾われた。

何年か後取締りが厳しくなったのでやめた。

スカウトのときに上手く引っ掛けていた女数人にたかることで、働かずに今一様暮らしていけている。

仕事はしていない。

しかしライフワークはあった。

女性と無理矢理性交渉をすること。

いわゆるレイプだ。

いわゆるもクソもないが。

奪った携帯で犯しているところを撮り、恋人らしい相手の連絡先に送信するのが何よりの楽しみだ。

アドレスが登録されている全員に送ってやりたいが、流石に面倒な事になりそうなのでやっていない。

余所の県ならまだしも、何かの実験で司法関係者が全員女だというう さぎ県で性犯罪者として捕まるのはゾッとしないので、一様見つからないようにやっている。

書き込まれていた連絡先から、ただでもらえるメールアドレスにすぐ返事が来た。

多分相手もそういう捨てられるアドレスを掲示板に書いていたのだろうと思いながら、やり取りをはじめた。

話はとんとん拍子で纏まる。

とある人口の少ない島が今若者を集めようとしているが、少し離れた所にある街での水商売ぐらいしか仕事がないので若い女しか集まってこない。

元々年寄りばかりで人口が少なく、増えたのは若い女ばかりで、警察などもいない。

だから治安は良くない。
良くないというか、悪い人間が入ってきても押さえられないだろうということ。
多少悲鳴が上がろうと、誰も出てこないということだ。
「本当かよ……」
半信半疑ながら、一様島に行くぐらいは構わないと思う。
暇なのだ、働いていないので。
「権利行使に加えさせてもらいます、と」
権利行使団は七人ぐらいの大所帯になる予定だ。
もちろん、全員が来たらの話。
島には百人以上、一人暮らしの若い女がいるという。
家に押し入り、犯すことも難しくないだろう。
上手くすれば、相当楽しい「権利行使」が出来る。
権利行使は、坂上が使う闇サイトでの隠語だった。
それはもちろんレイプのことである。
――レイプは男の権利。だから「権利行使」といったらレイプのことってわけだ。当然だよな。
漁船兼定期便だという船の上でにやける坂上。

彼はスカウトでそこそこやれるだけに、見栄えはいい。
彼が港に降り立つと、不思議と女ばかりの道行く人々が目を向けてくる。
――なんだ、普通でもやれそうじゃん。もちろんやらないけどな。レイプ最高。
約束の場所へ向かう。
スマホで、初めて来る場所でも地図は要らない。
山の中の一軒家、誰もいないので前に来たとき拠点にしたという場所にたどり着く。
周りはすべて山と森に囲まれ、それほど離れていない港町などは見えない。
いい場所だ、と思う。
正直、この島に来たのを坂上は少し後悔していた。
港に、しっかり交番だか派出所だかがあったのだ。
うさぎ県であるから、当然婦警がいた。
話と違う、と思った。
人口が少ないから警官がいないのではないのか。
だが、考えようによっては……とんでもない話だが、婦警一人なら、予定通り仲間が集まれば坂上たちは七人だ。
なんとでもなるのではないか。
もちろん、実際にやる気はない。
そんなことをすればうさぎ県警の総力が自分たちに向けられることぐらいはわかっている。
逮捕されるだけで済めばいいが、その前に相当どぎつい目に合わされる気がする。

――その上、絶対兎岳行きだ。

兎岳性犯男子刑務所。

看守が女性だけで、男子の性犯罪者だけを受け入れて**特別な教育**をしているという場所だ。

昔はまだ精神的な責めに重点が置かれていたようだが、最近はナノテクの薬の新しいのが普及したため、肉体的な責めが相当クローズアップされているという噂だ。

それは単純に言えば、男の急所を潰しては再生させるというエンドレスの「教育」だという。

まあ、ドM御用達といわれる「うさぎ穴」というサイト上での噂で、実際に刑務所側が認めている話ではないが。

――つまり、ドMどもの妄想だ。キ〇タマ責められたいっていう馬鹿どもの……

そう思わないと、一歩間違えれば兎岳送りの性犯罪などやっていられない。

やっていられないなら辞めればいいのだが、それは絶対に嫌な坂上。

建物に入る。

というようなことはしない。

しばらく木の陰から建物を見張る。

ろくでもないことをしている自覚はある。

少し待っていると、扉が開いておかっぱというかショートカットの華奢な男が出てくる。

遠目でも整った顔立ちなのがわかった。

――あいつが権利行使しようってのか？　女みたいだが、見た目のよらずキ〇タマはデカイのかねえ。

周りを見回し、再び中に入る。

ほかに人がいる気配はない。

今の一人ならなんとでもなると思い、坂上も中に入る。

「どうも」

手を挙げる坂上。

華奢な男が振り返り、少し高い声を出す。

「ああ。権利行使は」

「命の洗濯」

「お待ちしてました。僕はハメチン君」

「スロープアップだ」

ネット上のいい加減な名前を名乗りあう。

お互い名前を知らない方がいい関係性だろう。

「ほかの人たちは？」

「まだです」

奥に入る。

外から見ると結構ボロボロだったが、中は掃除されていた。

「あんた、住んでるの？」

「いえ、先に来て暇だったから掃除して……それより、スロープアップさん、実は僕まだ三回目ぐらいなんですけど……」

「ああ、そりゃほぼ童貞だな。俺はもう何回って問題じゃないな」

童貞呼ばわりに怒ったのか、眉を顰めるハメチン君。

「おいおい、このぐらいで怒るなよ」

「いや、別に怒ってなんか……それより、ほかの人たち来る前に、一発権利行使して来ませんか？」

まだ昼間である。

「気が早いな。若いから溜まってんのか？」

「というか、さっきこの先の山の中に、一人女が入っていったんですよ。結構若いのが」

「ほう……じゃあやっちまおう」

相手が一人で、こちらが二人なら不覚を取ることもない。

仮に、最悪雄玉を握り潰されるようなことがあっても、ナノテクで治るのだからまあ最悪ではない。

いや、最悪だが、取り返せる最悪だ。

――でも、やっぱり玉潰しだけは嫌だな。

どのぐらい痛いのかは想像もつかない。

　だが、玉が潰れる恐怖や屈辱は想像できる。

「なあ、三回じゃ、反撃で玉が危なかったことなんて無いよな？」

「あ、やっぱり玉、狙われますか？」

「ほかにどこを狙うんだよ。女だぞ相手は？　力なんて全然ない、キ〇タマも付いてない出来損ない」

「はあ……」

「あいつら、絶対キ〇タマ狙うから気をつけろよ。潰れた痛みはわからないが、恐怖と屈辱はわかるだろ？」

「うーん、狙われたことないから……」

「幸せな奴だな。……幾らナノテクで治るといわれても、本当に実際に治るまでは「本当に治るのか、一生このままではないか」と恐怖を感じる。それに、男でなくなった屈辱。それは女なんぞには想像もつかないだろうよ、元から男じゃない出来損ないにはな。でも、お前は付いてんだから考えりゃわかるだろ」

「そりゃもちろん」

　恐怖で顔が引きつったのか、背中を見せるハメチン君。

　尻の肉付きがいいのに少し驚く。

　――おいおい、いいケツじゃんか。男にしとくのは惜しいぜ。って、俺は何考えてるんだ？　やれると思って女抱かないできたからな。さっさと権利行使しないと。

　一軒家を出て、森に入る。

　森が少し開け、きこり小屋のようなものが建っている。

　中から物音。

「……なんか、ここまで来たらちょっと気が引けますね」

「あ？　ハメチン君帰るか？　俺一人でもやるぞ」

「そうですか……でも、やっぱり犯罪だし」

「お前も三回やってんだろ！？　キ〇タマついてるならレイプの一つ二つで迷うんじゃねえ！」

　手を伸ばし、股間を掴もうとする。

　が、真っ青で腰を引くハメチン君。

　掴みにいった手を掴む。

「や、やめてくださいよ」

「そうだ。男にとってここは最高に大事だ。いや、人間の体の中で一番大事で、価値がある部分はチ〇ポとキ〇タマだ。それがない連中が、それに奉仕するのは当然。させるのは権利だ」

　振り払い、背を向ける。

「犯ってくるわ。人が来ないか見とけ」

「わ、わかりました……」

　主催者が屁垂れるとは、信じられない。

　まあやっている声が聞こえれば、入ってくるかもしれない。

　どうせ人が来るような場所ではないのだ、見張りなど思いつきで口にしただけ。

一様、小屋の周りを回って観察する。
窓はあるが、勝手口はない。
小屋と言っても、数部屋あるようだ。
が、入り口を開けてすぐに女がいた。
というか、物音でそれがわかったので、思い切って踏み込んだ。
そこにいないなら、音を立てずに戸を開けようとか気を使ったが、すぐにいるなら関係ない。
「え、誰？」
「さあ、誰かな」
笑いながら部屋に入る。
立ち上がる女。
結構いい。
いや、かなり美人といえる、乳房も大きく坂上の好みだった。
「へへへ、あんた綺麗だね」
「か、勝手に入ってこないで。何のつもり？」
「勝手に入るつもりだよ、そこにね」
股間を指差す。
「俺のはでかいぜ、恋人や旦那のじゃ満足できなくなるかもな」
「やめて、来ないで！」
奥の部屋に逃げる女。
勝手口はないが、窓はある。
そこから逃げられても面倒だ。
が、問題ない。
窓から出ようとすれば時間がかかる。
奥の部屋に入る。

　入って、飛び上がる。

「女の世界へようこそ」

「歓迎するわ、レイパーさん」

「特に、大事な大事な、男の金の玉を念入りにね」

　手に手にバットや特殊警棒を持った女たち。

　十人ほどが部屋の中にいた。

「あっ」

　罠。

　いや、罠だかなんだかわからないがとにかく逃げた方がいいことはわかる。

　と、間が悪い事にハメチン君が入り口のある部屋に入ってきていた。

　後ろ手で戸を閉める。

「逃げるぞ！」

「何でですか？」

「待ち伏せだ！　どけ！　おぐっ」

膝。

ハメチン君の膝がゴリッと、坂上の男の肉塊を持ち上げ、腰骨に押し付けて押し潰す。

「あおおおお」

口をしゃちほこのようにして声を出す。汗が噴き出す。

――ぬごおおお、キ〇タマ、キ〇タマっ！　な、なんてこと……

股間を押さえ、床に膝を突く坂上。

内臓が引きつり、引き締められる。

肉玉が、命より大事な自分の危機だと全身に訴えている。

「キ〇タマ痛いですか？」

「な、何考え……逃げないと」

「僕は逃げませんよ」

どかどかと、奥の部屋から女たちが出てくる。

「さあ、逃がさないよ」

「キ〇タマ潰しの始まりだ」

「薬で何度も何度も治して、女の子とクソ男の間を行き来させてあげるよ」
「去勢祭り開催」
「とりあえずチンチ〇が大きいか気になるんだけど」
「小さいと同情でちょっと手加減しちゃうのよね」
「大きいとか言ってたよ」
「男は見栄張るから、おチンチ〇のことは」
「馬鹿よねえ！　デッカイチ〇ポがえらいなんて男が勝手に言ってるだけなのに！」
　ゲラゲラ笑う女たち。
　殺される。
　いや、殺されはしない。
　だが、男なら誰でも死んでも嫌なことを何度も何度もやられる。
　男の命、肉玉を潰される、何度も何度も。
　去勢される。
　もちろん、間抜けなハメチン君も。
　――ば、馬鹿野郎が、一人でキ〇タマ潰されろ。俺を巻き込むな……
　何とか、急所の痛みが治まってくる。
　立とうとして、胸を蹴飛ばされる。
　ハメチン君にだ。
「中里いい蹴り」
「元サッカー部でしょ？」
「ボール二個のサッカーなら現役だよ」
　ハメチン君と楽しそうに話し合う女たち。
　転がったまま、唾を飲む坂上。
　床にせめてうつ伏せになりつつ、中里と呼ばれたハメチン君を見上げる。
「ふふ、流石にわかったかな？」
　胸元に手を入れる。
　ごそごそするうちに、そこが一気に膨らむ。
　かなりの巨乳。
　尻の肉付きとつりあう、いい女の体。
　布だかなんだかわからない、妙な服のようなものを机に投げる中里。
「男装用オッパイ押さえる変装器具。これでわかった？　私は女。そして、あんたらを呼び寄せた理由も……」
「な、何でこんな事を」
「こんな事って！　まだ何もしてないでしょ！」
「まあ、もうわかってて当然だけどね！　これから念入りに念入りに、男の大事なタマタマを潰され続けるってこと」
「キ〇タマ、飽きるまでかわいがってあげるわ、このレイプ魔！」

「チ〇ポ縮んでる？」

「縮まない薬も飲ませてあげる。握り潰しやすいようにね」

倒れた坂上を取り囲み、グリグリと足で踏みつけて押す女たち。

蹴飛ばすというほどの力は入れない。

優しさではない。

仮に蹴り付けて気絶させたのでは、肝心の金潰しでの苦痛を味合わせることが出来ない。

少しでも体力を温存させて、少しでもじっくりと報いの玉潰しを噛み締めさせたい。

その思いが、蹴りを優しい物にしていた。

なんとなくそれが伝わり、震える坂上。

その耳元に、中里が口を近づける。

「権利の会って知ってるわね？」

坂上にとって憧れの組織だ。

レイプの自由を求めて、世界中で**レイプ旅**を行っている狂人グループ。

仮にレイプの自由を求めるにしても、レイプ旅でそれが手に入ったり、権利獲得への道筋がつくわけがない。

端から端まで意味不明の団体といえる。

外国でも日本でも支部がたまに摘発されるが、本部が何処かは不明だ。

勧誘は必ずレイプ現場で行われるという噂。

それ以外の勧誘は潜在的メンバーを逮捕したりして排除するための罠であると、権利の会の正式な広報が宣言している。

「ふふ、知ってるんだ……もしかしたら、あんたもメンバー？」

「そ、そんな……」

どんな状況でも、そう誤解されれば喜ぶクズそのものの坂上。

だがこの場でだけは、その誤解は絶対に受けたくない。

頬を引きつらせ、震える。

「お、俺なんか権利の会のメンバーなわけない……」

「じっくり聞き出してあげる。皆、押さえて！」

「うわあああああ！　やめろ！」

「あははは！　怖い怖い！　キ〇タマ潰されちゃうよ！」

「はーい、大人しくしましょうね僕、チンチ〇ついてるんでしょ？」

「先生、キ〇タマはもうすぐ無くなりまーす！」

「大丈夫、ナノテクで十秒で治るからね」

「でもまた潰されまーす！」

「永久に治してあげるわ」

「じゃあ永久に潰します！」

「それじゃ、先生も潰すの手伝うわ」

「ぎゃはははは！　ひでえ！」

笑いながら、坂上を転がし、仰向けにして手足を押さえ込む。
そしてベルトに手を伸ばす。
坂上も力が弱いほうではないが、鍛えているらしい女十人ほどに押さえ込まれては動きようが無い。
「やめろー！」
「チンチ〇見ないで！」
「キ〇タマも！」
「ぎゃははは！　縮み上がってんだろ！」
パンツごとズボンが下ろされる。
女たちの目が坂上の股間に集中する。
「なんだ、普通じゃん」
「ちょっと大きいかな」
「っていうか、キ〇タマ縮み上がってチ〇ポがこれなら、巨根じゃん」
「うわー、生意気！」
「おぐ！」
ゴリ、と女の拳が坂上の睾丸を押し潰す。一瞬白目を剥く坂上。
構わず、拳を引いてさらに叩き込む女。
「生意気、生意気！　威張ってんだろ、チ〇ポデカイって！　キ〇タマ潰れちまえ！　潰れちまえ！」
「はぐっ！　ひぐ、い、威張ってない……おぐっ！」
ボスボス、と一物ごと縮み上がった肉玉を殴る女。
必死で足を閉じようとする坂上だが、ズボンを脱がされたあと、また足は左右に引っ張られて大股開きだ。
無防備な股間が女の拳で叩き潰される。
「あははは！　押さえられたら男なんておしまいね！」
「女の体の方が頑丈よね！　キ〇タマ分！」
「出っ張りもちょん切られるかもしれないし！　男って弱いもんよねえ！」
「オラオラ！　潰れろ、キ〇タマ潰れろ！」
「おごおおお！」
ゴリ、ゴリ、と殴るたびにグリグリと拳を回し、睾丸を磨り潰す女。
のたうつ坂上。
その耳元に、もう一度口を近づける中里。
「私たち、「金砕き」のメンバーなの」
「あ、チ〇ポさらに縮んだ！」
「デカイからまだ縮む余地あるんだ！　やっぱ生意気、キ〇タマ潰してやりな！」
金砕き。
それはうさぎ県にいくつもある、いわゆる去勢団体の一つだ。
男を去勢するのを主な目的とする女性だけの団体。

――そ、そんな……金砕きだなんて……じゃあここにいるだけじゃすまない……

どれだけメンバーが集まってくるかわからない。

坂上だけではなく、ハメチン君こと中里を除けば後五人のレイプ魔がこの島に来るはずなのだ。

それらを大歓迎するのに、どれだけの人数が集まるか。

金砕きと仲がいい他の去勢団体からも応援が来るのではないか。

「あああああああああああ！　許してくれ！　頼む！　はぐっ！」

「ざけんなコラ！　私がそういった時どうしたよ！？」

「そうだガキが！　チ〇ポコ叩き潰す！」

「ぎあああああああああああああ！」

はじめの一人だけではなく、周囲の数人が同時に股間を殴り始める。

一物は玉よりは遙かに頑丈とはいえ、体の他の部分よりは脆弱なのはいうまでもない。

目を見開き、泡を吹く。

唇を噛み千切りそうになるほど噛むが、ほとんどそちらの痛みは感じない。

男性器からの危険信号だけで、それこそ心臓が止まるほどだ。

「うふふ、皆レイプぐらい何度もされてるのよ？　あなたにじゃないけど、同罪よね。金砕き皆がそう思ってるわ。歓迎してあげる。去勢祭りは始まったばかりよ」

そういって、坂上を一軒家で迎えたときのように穏やかに笑う中里。

体験版終わり

この後坂上、一旦逃げ出すもまた捕まり、数万の女性によって去勢リンチに！

去勢器具という悪魔の道具も登場し、効率的な去勢も行われますが、

最後にはやはり踏み潰しという原始的な方法が用いられます。

悲劇的な運命、という気もしますが、

逃げ出す前についでにレイプするような根っからのレイプ魔なので

まったくの自業自得という気もします。

続きは製品版でお楽しみください